P－20　地域における幼児保護者および高齢者への歯科保健指導・相談の満足度
～昨年度との比較より～

○三阪　美恵[1]、千綿かおる[1]、秋房　住郎[2]、引地　尚子[1]、久保田浩三[1]、牧　憲司[3]、園木　一男[2]、金久　弥生[1]、高橋由希子[1]、日高　勝美[2]
[1]九歯大・口機能支援、[2]九歯大・口保管理、[3]九歯大・口腔発達

昨年度より、口腔保健学科を中心として地域の幼児保護者及び高齢者を対象とした歯科保健活動を実施している。引き続き、今年度も、歯と口の健康の保持増進および食べる機能の維持向上について講話と実技指導を行い、その後、個別で歯科保健相談を行った。歯科保健活動の質の確認のため、事後アンケートにより満足度を調査して検討した。

実施対象は、北九州市内の保育園2箇所と幼稚園3箇所および老人クラブ25箇所とした。対象者は、保育園・幼稚園の幼児とその保護者164名および老人クラブの高齢者233名とした。対象別実施内容は、幼児及び保護者には、手遊びから導入し、むし歯の成り立ち、口腔内観察、歯ブラシチェック、ブラッシング等の講話と実技指導を30分間行った。さらに保護者には資料を用いて、仕上げ磨き、デンタルフロス、永久歯への交換、酸蝕歯等について20分間説明後、個別歯科保健相談を受けた。高齢者には資料を用いてムセ、口腔機能、摂食嚥下機能、口の体操等を40分間、歯科保健講話と実技指導を実施後、個別歯科相談を20分間行った。満足度調査は内容、資料、時間をそれぞれ満足から不満までの5択から選択してもらった。

参加総数は、397名であり、昨年度比142.8％増であった。特に老人クラブの高齢者は、実数69名増の昨年度比142.1％増であった。また、アンケート結果は、全体の平均満足度は4.8±0.6、保護者は4.7±0.6、高齢者は4.8±0.6であった。

本事業は、参加者が増え、満足度も良好であることより、地域住民に浸透しつつあることが考えられ、継続していく意義は大きい。

P－21　本年度の口腔保健学科学生の社会人基礎力

○園木　一男[1]、井上　博雅[1]、日高　勝美[1]、高橋由希子[2]、千綿かおる[2]
[1]九歯大・口保健管理、[2]九歯大・口機能支援

社会人基礎力は、経産省が定義する「職場や地域社会の中で多様な人々と仕事を行っていく上で必要な能力」とされ、その診断は、就職活動時の自己分析や大学生活の過ごし方を示唆する資料となる。平成24年度、３年生（１期生）の社会人基礎力の総合スコア（３つの能力、「前に踏み出す力」・「考え抜く力」・「チームで働く力」の合計）は他学より高く、１年生（３期生）は他学と同じであった。平成25年度、１期生、３期生の総合スコアは上昇し、１期生はやはり他学より高かった。そこで、平成26年度は４学年すべてを調査し、各学年における社会人基礎力の相違を把握した。

Webサイト上で３、４年生はsenior版、１、２年生はjunior版（各選択問題60問、日経HR）を回答した。

総合スコアを他の大学と比較すると、他学より１年生（５期生）は高い、２年生（４期生）は平均レベル、３年生（３期生）は高い、４年生（２期生）は平均レベルであった。３年生（３期生）と１年生（５期生）は平成24年度の３年生（１期生）と１年生（３期生）の総合スコアと比較し、１年生（５期生）は有意に高かったが、３年生（３期生）は差がなかった。４年生（２期生）と２年生（４期生）は平成25年度の４年生（１期生）と２年生（３期生）と比較し、２年生（４期生）は差がなかったが、４年生（２期生）は有意に低かった。

１期生が４年生時は他学より高い総合スコアであったことを考えると、本年度の４年生（２期生）は社会人基礎力が１期生より身についていなかった。その他の学年は前年、前々年の学生と変わらなかった。

各学年で社会人基礎力の到達度に差があることが明らかになった。